

なんたる失態だ：私は慨嘆した。

釈明の余地のない失態なのである。

いや、私に問題があるのではない。環境の罪である。

だいたい私のような勤勉・実直を絵に描いたような青年内科医が、冒頭から釈明の余地のない失態に追い込まれるくらいであるから、その環境の劣悪さも想像がつくであらう。

いずれにしても重篤な事態である。もはや危篤といってよい。

その危篤の事態に気づいたのは、つい先刻のことであった。

今夜は救急外来の当直である。

救急部の入り口にはけが人・病人が列をなし、診察まで一時間待ちのありさまだ。

時刻はすでに夜十一時。朝までまだ十時間ある。私は当直帯に入ってから十八人を診察したところでぐったりとなり、やれやれとため息をついて、ふとなにやら記憶のはざまにひっかかるものを感じて手を止めた。

カレンダーに目をやり、日付を確認して思わず息を吞

んだ。

しまった！

今日は私と細君にとっての、初めての結婚記念日であつたのだ。

慌ててさらに二度確認する。しかし確認回数を増やしたところで今日が昨日になるわけもない。結婚記念日終了まであと一時間。

「なんたる失態だ……！」

私は血を吐くような思いで独語した。

三日前まで覚えていたのだ。三日前から重症患者の治療でICUに泊まりこみになり、さらには病棟患者にも急変が重なり、ほとんど眠っていなかった。日付の感覚がなくなり、いつ食事をとったかも記憶があやふやな状態で、右往左往しているうちに気づいたら当日の夜十一時……。

ちらりとナース・ステーションを一瞥し、せめて細君にメールの一通くらいは送ってこようと後ずさりしたところ、有能な看護師諸氏が見逃してくれるはずもない。

我ながら不可解な動きをしていると、たちまちにして眼前にカルテの山が積み上げられた。

不敵な笑みで手招きする白衣の悪魔……否、天使たちを前に、私はいったい何ができたであろうか。

私は眼前のカルテの山を睨みつけて、再び独語した。

「よからう……」

そして傲然と微笑する。

「そう言うことであるのなら、私にも考えがあるのだからな」

言うまでもないことだが、考えなどあるはずもないのである。

補足をせねばなるまい。

私こと栗原一止は、本庄病院に勤務する五年目の内科医である。

信濃大学医学部を卒業したあと、単身、松本平の中ほどに位置するこの病院に我が身を投じた。以来、五年間働き続けている。本庄病院は病床数四百床で、同じ松本平にある信濃大学医学部附属病院の六百床には及ばぬまでも、地方都市の一般病院としては相当に大きい。一般診療から救急医療まで、幅広い役割を果たす地域の基幹病院である。

ちなみに、私の話しぶりがいささか古風であることはご容赦願いたい。これは敬愛する漱石先生の影響である。学童期から『草枕』を愛読し、全文ことごとく暗誦するほど反読していると、こういうことになる。瑣末な問題のはずだが、世の人々はこの一事をもって私のことを変人と笑うのだから嘆かわしい。このような場合は、彼らの不寛容をこそ笑い飛ばせばよいのだ。

さて、とカルテの山を小脇にかかえつつ辺りを見回せば、いつものことながら救急部は大騒ぎである。

腹を痛がるおじさん、めまいで床に座りこんでいるおばあさん、喘息でひゅーひゅーいつているお嬢さんに、足を骨折して歩けないお兄さん、そして彼らを取りかこむ家族、親戚、付添い人……。

信州の一地方都市にすぎないこの町の、どこにこれだけたくさんの方がいるのか疑いたくなる。もしかして人々は、日中は人目につかぬ地下にでも潜っていて、日が暮れると同時に街中へ飛び出し、その足でいつせいに病院につめかけてくるのではないか、などとわけのわからない妄想をしてしまう。

それくらい人で溢れている。

ひいき目に見ても、通勤時間の駅前バスターミナルより人が多い。

この患者の山を、内科医五年目の私と研修医二人で対処する。

無茶と思うであろう？

無茶なのである。

その無茶をなんとか切り回しているのが、地方病院の現状と言うしかない。

とりあえず最前線できりきり舞いの研修医諸君を助けるべく、私も再び参戦する。